

外學四子印全集

第十七卷



谷崎潤一郎全集 第十七卷

定價二〇〇〇圓

昭和四十三年三月二十五日初版發行
昭和四十九年二月 十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高 梨 茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

吉井勇君に

昭和二十七年一月「每日新聞」

吉井君

毎年君は宮中の歌御會の用などがあつて正月は東京へ出て來る例になつてをり、ついでに熱海へも立ち寄つてくれたものだが、今年は上京しないのださうだね。しかし去年の秋に、あの寒いと云つてゐた油小路の家を引き拂つて、銀閣寺の終點に近い日あたりのよい新居に移つたことだから、ことしは御夫婦お揃ひで暖かい正月を迎へられたことと思ふ。今度の家はいかにもしやれて、こじんまりしてゐて、實は僕もちよつと羨しくないことはない。

僕は豫定の通り、舊臘三日に家族をつれて此方へ來た。先づ三月の中旬ぐらゐまではこゝを動かないつもり。ことしは妻、娘、渡邊の妹の外に、渡邊家の若夫婦までが全部此方へ避寒したので、潺湲亭せんくわんはがらあきになつた。「妻妹娘花嫁われを圍む潺湲亭の夜のまどゐかな」と云ふ歌があるのだが、昨今そのまどゐは雪後庵に移つたわけだ。ところで先日、此方へ着いて二三日後、妻が西山の佐佐木信綱大人のところへ用事があつて使を出したら、「吉井さんがお宅の御主人のことを新聞に書いてをられますよ」と云つて、わざ／＼その新聞を持たして寄越された。佐佐木大人はかう云ふ風な細かいことによく氣の付くママなお年寄なので、いつも甚だ恐縮するのだが、たしか本年八十一翁になられた筈の大人などに比べれば、君や僕なんかはまだ青年の部だ。僕が始めて帝大の國文科に通ひ出して、上田萬年、芳賀矢一、森槐南、藤岡作太郎等々の諸先生に教を受けたころ、當時の若き竹柏園主人も講師として教鞭を取つてをられたので、

僕はこの人の催馬樂さいばらの講義を聞いたことがあり、その催馬樂を朗讀する聲の調子、抑揚のつけ方、先代鴈次郎の口跡こうせきに似た一種のさびのある聲音、等々の美しさを今も明瞭に記憶してゐるが、蓋しあのころの大人は年齒漸く四十歳前後だつたであらうか。さうして實にあの時以來の佐佐木先生であることを思ふと、まことに歲月の長きを感じ、今も猶なほ鬢はな鏢しやくとしておはす大人の壯健なのに驚かされる。

○

吉井君

僕は君があの新聞紙上で、君と僕との古い交遊關係を回想してゐる文章を、たいへんなつかしく讀んだ。君も書いてゐる通り、われわれ二人が初對面の挨拶を交したのは、當時青山北町七丁目にあつた恒川陽一郎の宅に於いてゝあつたが、あれは明治何年だつたらうか。多分四十二三年ごろのことらしいが、どうも正確には思ひ出せない。與謝野寛氏に牽ひゐられて、白秋と共に君が來たことは覺えてゐるが、あの日は晶子さんはをられなかつたやうに思ふ。他にもまだ誰かゐるか、客は君たち三人だけだつたか、此れもたしかな記憶がない。此方は恒川と、大貫晶川と、松本重彦と、僕とだけではなかつたらうか。僕はまだ角帽を被つた無名の學生に過ぎなかつたが、君と白秋とは既に明星派の歌人として名を成してゐた譯であつた。君は近頃僕と同席することがあると、同じ歳でも僕は七月生れ、君は十月生れであるの故を以て、いつも僕を上席にすゑたがるが、文壇的に云へば君の方が少くとも二三年は先輩なのだ。僕は君があから顔の、ニキビ満面の風貌をしてゐたのをありあゝと想ひ浮かべることが出来るのだが、不思議なことに、君の容

貌は今も餘り四十年前と變つてゐない。今の方があの時分よりは肥滿して、さすがに大人の風格を帯びてはゐるが、そしてニキビもなくなつたが、皮膚の色、艶や目鼻立などは大體同じやうな氣がする。さう云へば晩年の白秋も、やはりあの時分とそんなに變つてはゐなかつた。彼も亦昔から、南國的な暖かい血色をした、ふつくらした豐頬の持主であつた。僕は此の二人のゆたかな風貌をした青年が、青黒く瘦せた、神經質らしい、貧血症らしい寛先生を中に挟んで左右に控へてゐるのを見、寛先生はいかにも頼もしい門弟を持つてゐるやうに感じた。

○

パンの會やその他の宴會の後で、主として小山内君あたりに引率されて一緒に惡所へ出かけたこと、朝歸りに重箱で一杯飲み、歸りに蒲燒の折を提げて葛飾の白秋を訪れたこと、などは君も書いてゐるが、小網町の鴻の巢で或る晩二人が前後不覺に酔ひつづれて歸れなくなつてしまひ、二階座敷に泊めてもらつたところがあるのを、君も忘れはしないだらうね。明くる朝目が覺めて見たら枕もとに洗面器が置いてあつたら、君だか僕だかど店を擴げたものらしいが、吐いてある物がそんなに汚らしくなく、ビフテキの肉片のやうなコチコチした固形物の塊一つだけだつたことまでも、末だに僕は覺えてゐる。

君と僕との因縁について、僕に取つて特に忘れられないことがある。僕が始めて新思潮以外の雑誌へ物を書いて原稿料を貰つたのは、戯曲「信西」をスバルへ載せた時であつたが、その時交換的にスバル同人のもの新思潮へ貰ふことになり、それに選ばれたのが君の戯曲「河内屋與兵衛」だつた。君は原稿料を貰

ふと云ふことは無論その時が始めてはなかつたらうが、僕には全く此れが最初の経験だつた。君の「河内屋與兵衛」はその後間もなく左團次によつて自由劇場で上演されたが、僕の「信西」は、青春物語にも書いたやうに小山内君と仲違ひをした結果上演されるべくしてされず、後年自由劇場が亡び、小山内君が物故してから漸々左團次が歌舞伎座で演じ、上山草人が有樂座で演じた。あの戯曲交換の時日は明治末年のことに違ひないが、あれから幾星霜を経た今日、圖らずも二人は京都の住人になり、今年の都踊の臺本には共同の作者として名を連ねることになつた。往時茫々、眞に夢の如しであるが、長い間の人生の變遷離合の跡を顧ればまことに不思議な感がする。

○

吉井君

君は昔から人に接しても餘り多くを語らず、ニコニコ笑つてゐるだけであるが、それでゐて相手を魅了する一種の腹藝を持つてゐる。黙つてゐて何もかも心得、よく程を辨へてゐる、急所々々はちゃんと引締める術を知つてゐるのであるから、まことにコハイみたいなものだ。武林無想庵などは、「吉井は實にいゝなあ」と云つて早くから君に參つてゐたものだが、男ばかりでなく、女でも君の腹藝に參らされた者は少くあるまい。一座の中で終始ニヤリニヤリしてゐる君が結局獲物を獲得して、通人粹士を以つて任ずるおしやべり連が鳶に油揚げを攫はれた恰好になつたことも、一再ではなかつたらしい。吉井の奴は「ずるい」と云ふ陰口などもあつたけれども、あれは他人が眞似ようとして眞似られるものではなく、江戸人の洒脱さ

に鹿兒島人の重厚さを兼ね具へた君にして初めて出来ることで、技巧ではなくて天成なのだから仕方がない。君の此の腹藝は老來いよ／＼びつたりと身につき、その肉體に風格と貫祿とが加はるに従つて、春風駘蕩たる溫容の中に圓轉滑脱の才氣を包み、一段と魅力を發揮し出したやうだ。

君は本來は伯爵の御曹子だが昔から凡そ君くらゐ「平民的な」人はなかつた。君に對しては「平民的な」と云ふ言葉を使ふのが滑稽なくらゐで、僕は君が山の手生れであり、名門の子弟であることをいつも全く忘れてゐた。君はまた少しも文學者ぶらず、歌人ぶらないのみか、文學者や歌人扱ひされるのが大嫌ひのやうに見えるが、僕はさう云ふ君の人柄が實に好きなのだ。實生活に於ける君は「歌人吉井勇」であるよりも「俳諧亭句樂の死」の作者たる面が多いであらう。君は昔から遊俠の徒や藝能人と交ることを好む風があつたが、今日洛東の君の門を最も多く叩く者は、恐らく東京あたりから下つて來る寄席藝人、落語家などであらうし、さういふ社會の人々と酒間に見えて世間話をする^{まみ}ことが、君は何よりも楽しいのであらう。

○

君の短歌については、僕は最も熱心なる讚美者の一人であるが、それを論じ出すと長いことになるし、門外漢たる僕などがさう云ふことに餘り^{くちばし}嘴を入れると却つて君に迷惑を及ぼすことがあるらしいから、こゝでは差控へておかう。今度の都踊の臺本も僕は單に名義だけの脚色者に過ぎず、詞章は全部君の作であるが、今日かう云ふものを作らしては恐らく君の右に出る者はあるまい。此の間の「風神雷神」や「光琳屏

風」などもなか／＼よく出来てゐた。短歌は作者が多いけれども、かう云ふ音曲ものゝ作詞者はだん／＼減つて行くので、今では君の獨壇場になりつゝある。

○

吉井君

君は今や人間が圓熟の域に達し、作歌も精妙を極めて來て、齋藤茂吉氏の病蓐にある今日第一人者の感があり、加ふるに今度の奥さんとの仲睦じく、君の所謂「老妹^{おいも}」の歌には屢々^あわれ／＼も中てられてゐる始末であり、現在甚だ幸福を楽しんでゐるやうに見える。あれはをとしの秋であつたか、僕は君が酒盃に親しみ過ぎるのを憂へ、阪大の布施博士のところへ引つ張つて行つたことがあつたが、診斷の結果は僕よりずっと健康状態がすぐれてゐることが分つた。君の家は長壽の血統であるから、もと／＼體質もよいのであらうが、一つには君の健康は、あの物事にコセコセしない寛濶な態度、悠々迫らない心の持ち方に起因するところも多いであらう。それでも去年あたりは、冬はとてもやり切れないと云つてゐたものだが、今度の家はその心配もないとすると、もう此れからは本腰で京都に落ち着くのではなからうか。僕も君がゐるのなら京都で餘生を送りたいのだが、僕は一層寒がりでもあるし、布施博士の忠告もあるので、一年と熱海で暮す日數の方が多くなつて行く。恐らく此れでは熱海の方が本據になつてしまふであらう。終戦以來五年間同じ土地で暮したが、又君と別れ／＼になりさうだ。

吉井君

手紙ともつかず感想ともつかない變な文章を書いてしまつたが、先づ此の邊で筆を擱いて、遙かに新春の祝詞を述べ、君達御夫婦の清福を祈つて祝盃を擧げよう。それにつけても、此れは特に奥さんに御願ひしておきたいが、僕より健康だからと云つてどうか吉井君に深酒させないやうに、くれぐれも適當にブレーキをかけて下さい。

或
る
時

昭和二十七年三月「毎日新聞」

日本橋區南茅場町、——今はたしか日本橋區に、いや中央區に南茅場町と云ふ町名はない、大震災前迄あつたその町は、震災後北島町龜島町など、云ふ附近の町を併合して出來た、たゞの茅場町と云ふ町の一部になつた。——その南茅場町に住んでゐたのは、いつからと云ふことがはつきりしないが、多分十一二歳の頃から十五六歳迄の數年間、明治三十年頃から三十五年頃に至る期間であつた。番地は何丁目なしの二十五番地だつたと思ふ。今の茅場町の交叉點から永代橋へ行く廣い通り、あれは震災後にあんなに廣くなつたので、私の住んでゐた家の跡は現在電車の走つてゐる路面のどこかに當る筈である。當時は今の大通りよりずつと狹かつたのであるが、その頃としてはやはり普通よりは廣い通りであつた。それを日本橋の方から來た右側の、靈岸橋の少し手前にお神樂堂かぐらだうの附いたお稻荷様があつて、その角を曲る小さな路次があつたが、それは永代橋の通りと並行の裏通りへ抜けるほんたうに細い道で、その左側に私の家はあつたのである。私の家と云つても、蠣殻町で米の仲買店をしてゐた父が、相場で失敗して逼塞ひつそくしてからの住居だつたから、もちろん借家なのだつた。六疊の居間と、四疊半の女中部屋と、階下を造作して八疊ほどの座敷に直した二階造りの土藏と、部屋數から云へばたつた三間しかない家、——でも、今日の人は三間の家と云ふと、戦後のバラック建てとか簡易住宅などを想像しさうだけれども、あゝ云ふものとは少し違ふ。兎に角土藏が附いてゐたのだし、玄關なしの、いきなり六疊の居間になつてはゐるけれど、路次に面した潜くぐりを開けると、飛石傳ひに、片側が土藏の腰卷、片側が板塀の奥まつた通路が附いて

ゐて、その突當りに格子戸があり、三和土^{たき}の土間があり、土間へ這入ると上り柵^{かまち}に中硝子の障子が簾まつてゐて、その中が六疊の居間であつたし、さゝやかながらも八つ手や南天の植わつた庭があつたし、庭から勝手口へ廻れるやうに板塀が圍らしてあつたし、その時分にはよくさう云ふ路次に隠居所や妾宅などがあつたものだから、その家も以前はさう云ふ種類の人が住んでゐたのであらう。家族は兩親と、私と、弟の精二と、三つぐらゐになる妹のお園と、ばあやとの六人であつた。ばあやはおみよと云ふ天保生れの老婆であつたが、私の乳母^{うば}に雇はれたのが始まりで、私の次に精二の守りをし、當時は女中代りに臺所の用をしてゐてくれた。六疊の間にお定まりの茶筴筒長火鉢があつて、父と母とが火鉢を隔てゝ夫婦喧嘩の遣り取りをしたり小鍋立^{こなべだて}をしたりしてゐたのを、今も時々思ひ浮かべるが、夜は兩親は藏座敷に寝、私と精二とが六疊に寝た。土藏の觀音開きのところは、普通なら四角な太い格子の、金網を張つた引戸が簾まつてゐるべきなのだが、そこは中が座敷に改造されてゐたので、やはり中硝子の障子になつてゐた。觀音開きの前が庭に面した縁側で、縁側の先に厠^{かはや}があつた。夜など、私は厠へ行く時に自然土藏の前を通るので、中硝子を透して兩親の閨を覗くと、まだ電燈が普及してゐない時分で、中にぼんやり行燈^{あんどん}がともつてをり奥の方に母、口もとの方に父が寝てゐた。(お園が何處に寝てゐたか覺えがないが、多分父の布團と母の布團の間に、別に小さな布團を敷いて寝てゐたのであらう)母は元治元年の生れだつたから、その頃が三十五六歳、父が五つ六つ上であつた。私の家は母が家附、父が養子だつたから、何かにつけて父は母に一目置き、殊に自分の失策で財産をなくしてからは、ゆとりのない中でもせいゝ母をいたはるやうにしてゐたので、夜具布團なども母のは父のよりも上物の綿^{めん}や絹布^{けぬ}が使つてあつたやうに思ふ。朝なども、父の